

古代の須恵器復元

よしもと
好本 宗峯

（本名 年勝 一
九三八〜二〇二〇）

― 須恵器

礎

（ハソウ）の旅路「唐丹の子供たちに届くまで」―



一 旅の始まり

好本宗峯さんが、須恵器専用窯（第2号）を築き、須恵器復元を創めたのは、昭和56年（1981年）でした。

備前焼のルーツである須恵器再現ため、5年の年月をかけて須恵器の陶片や粘土、窯跡の形状、焚き木の種類や焚き方を調査し、研究します。作品が完成した頃、奈良の古刹不退寺でハソウ演奏の話が持ち上がりま
す。不退寺では、毎年5月、在原業平を偲ぶ、恒例の「業平忌」が行なわれていました。平成10年（1985年）5月の「業平忌」で



初めて、創作ハソウ曲「大河の調」が、
献奏けんそうされたのです。

ハソウは大きさによって音程が違い
一緒に吹くと、それぞれが共鳴しあい
聞く人の心に響き、安らかな気持ち
広がります。

ハソウから生まれた「大河の調」を
奈良の不退寺で演奏した事が、ハソウ
を現代に蘇よみがえらせた第一歩となったの



です。その後も、地元の古寺こでらに招かれて演奏し、
こうした行事の積み重ねから「ハソウを楽しむ
会」が誕生しました。「須恵器ハソウ」が、「人々
の心を繋ぐ架け橋」となって、そこには須恵
器ハソウ復元に向けた好本宗峯さんの姿が浮かびます。

須恵器復元が完成したころ、坂口憲一郎さんが、地元の茶人に伴ともなわ
れ宗峯さんを訪ねます。坂口さんは、須恵器復元に賭けた宗峯さんの話
などの未知の世界に時を忘れて引き込まれ、いつしか宗峯窯の窯入れや

かまた
窯焚きも手伝うようになり、坂口さんの備前焼と須恵器に対する好奇心
は、^{とど}留まることを知りませんでした。

坂口さんの須恵器への深い熱意と探求心に惹かれた宗峯さんは、自分
の名前「宗峯」の「宗」^{しゅうほう}を授けます。坂口憲一郎さんは「宗憲」^{そうけん}を名の
り「ハソウを楽しむ会」会長 ^{さかぐちそうけん}坂口宗憲として、ハソウと共に須恵器
の歴史とその魅力を、語り継いで行くことを、^{ひそ}密かに心に誓うのでした。

二 礎と共に「鎮魂の歌 巡礼の旅」 高館 千枝子

2011年3月11日、東日本大震災が起き、東北地方は未曾有の

震災で大きな打撃を受けました。奇しくも、
宗憲さんにとって、「須恵器ハソウの歴史と思
い」を伝える時になってしまいました。

宗憲さんは、「古代の人々は、亡くなった人
を追悼するために、ハソウを吹いた事」を思
い浮かべ、被災地慰問団に加わり、岩手県大



船渡市を訪問し声楽家の「鎮魂歌」に合わせてハソウを吹きました。
復興が遅々として進まず、人々も疲れ果て、見渡す限り荒涼とした被
害の痕跡が、生々しく残る被災地。2012年秋の訪問でした。

2016年2月12日、NEXラジオ深夜便ディレクター坂口憲一郎（宗憲）さんが、私の自宅を訪問しました。東日本大震災教育支援プロジェクト「唐丹希望基金」の取材に来たのです。昼食時の坂口さんの話題は「須恵器ハソウ」の歴史と復元に挑んだ好本宗峯さんのお話がほとんどでしたが、私の耳にはこの後の取材インタビューが気になり、ハソウの事などは耳に入ってこず、ただうなずき、あいづちを打ちながら聞くだけで精一杯でした。

NEXラジオ深夜便「世界へ広がれ 鎮魂の歌」の放送は3月3日午前4時からでした。放送直後からの思いもよらぬ反響に驚き、と同時に募金も徐々に増えはじめ、唐丹希望基金（以下、唐丹基金）は安定期を迎えたことを実感しました。[明日への言葉：高館千枝子（唐丹希望基金代表）](#) [世界](#)

[へ広がれ 鎮魂の歌 \(asuhenkotoba.blogspot.com\)](#)

それまでの5年間、郵便局通いと募金者に送る通信の編集に明け暮れ、夢にまで出てきた募金の心配も徐々に消え、この5年を支えてくれた一人一人の思いに心が惹かれ、改めて感謝の気持ちが湧いてくるのでした。支援して頂いた方々に直接会って、感謝の気持ちを伝える「鎮魂の歌 巡礼の旅」3ヶ年計画が生まれたのは、ごく自然でした。

不思議な事に、坂口さんが我が家で話した「ハソウ」なるものの音色



も聞かなくては、との思いに駆られ
5月の巡礼の旅「京都亀山・鎮魂の
歌演奏会」の後、岡山まで足を延ば
し、びぜんしいんべ備前市伊部の宗峯窯を訪ねまし
た。あの時は、三人でハソウを吹い
て下さいました。

三人が、部屋の角すみに向き合って立ち
ハソウを吹いた時、その音が部屋中
に共鳴し、私の体内にも伝わり、そ

の瞬間、不思議な心境に駆られ、二十歳で受けた心臓手術後、集中治
療室で見た夢を思い出しました。それは「小さな小川に架かる橋を渡
ろうとした時、遠くの空から一羽のコウノトリが飛んでくるのが見え
ました。布に包まれた赤ちゃんを銜くわえたコウノトリは、私の頭上で大
きく巡回したその瞬間、我に返った」というものでした。術後一週間
の昏睡から抜け出し、眩しい太陽の光に導かれて目覚めた私は「生き
ている、生かされた！」と、心の底から歓喜に満たされました。臨死
の世界で、遠くでかすかに響いていたのと同じ音を、45年も過ぎ、
初めて訪れた備前の地で聞くとは思ってもいない事でした。



坂口さんは、その後、「鎮魂の歌 巡礼の旅」に参加する時は、常にハソウ持参でした。(2016-2019.pdf (eec-2020.com))

私の旅の目的と、坂口さんの戦争への「鎮魂と平和」を願う気持ちが重なったのだと思っています。

「鎮魂の歌 巡礼の旅」は、私の一人旅の計画でしたが、私を一人にさせない

のが唐丹基金の仲間でした。巡礼の旅企画を、ホームページで公開すると、支援者の参加も多く、友好を深める旅でもありました。2016年7月、盛岡市長善寺仏教婦人会主催「東日本大震災5年を振り返る講演会」に招かれ、この時初めてハソウと共に鎮魂の歌を歌いました。(01長善寺鎮魂の歌 - YouTube) それからというもの、ハソウと共に仲間を増やしながら、巡礼の旅が続きました。

9月の巡礼の旅「2016年9月7日 紫蘭会山を歌うコーラスの皆と歌う「鎮魂の歌」(東京都)で、「ハソウプロジェクト」を発足させ「ハソウ」は、唐丹基金の象徴として、「鎮魂の歌」と共に世界へ広める活動に加える事にしました。(hasouhiwa.pdf (eec2020.com))



唐丹基金ではハソウの会を「ハソウを愛する会」と呼ぶ事にしました。

京都きんこう楽器ファミリーコンサートに、唐丹基金のほとんどの役員が参加したので、私は唐丹の子供たちにハソウを贈る事を提案しました。震災から5年経ち、被災地にも落ち着きが見え、唐丹基金の財政にも余裕が出てきた事が大きな提案理

由だった他に、「釜石市の戦時中の二度にわたる艦砲射撃と何度も襲う津波を乗り越えてきた釜石の歴史を子供たちと一緒に学びながら、鎮魂と平和を願う友として、交流していきたい」と思うようになりました。2018年3月の卒業生から「ミニはそう」を贈る事に決定。

募金活動の初期、私が抱え込んだ震災への思いを、唐丹基金のホームページで閲覧し、私に寄り添い励ましの言葉を何度も送ってくれた方が、カナダ在住の日本人女性イシユトクさち子さんでした。会ったこともなく、しかも外国に住んでいる人のメールで気持ちも心も軽くなり「私は、一人ではない！」と思う事が出来ました。どんなに、嬉



しく、また、心強かった事か。その感謝を伝えるため「ハソウを持ってカナダに行かなければ!」。その思いは異常なほどに固く^{注⑥}2017年6月、カナダ、アメリカを6人で訪問しました。この時、ハソウが初めて海外に渡りました。イシュトクさち子さんや旅程の全てをアレンジしたメリー・ハーツェル節子さん他アメリカ・カナダで



暮らす日本人12名にハソウを贈りました。
ハソウは、121名(唐丹中学校卒業生73名、一般48名)に「ハソウ継承者証書」と一緒に届けました。2016年春から2018年12月までの「鎮魂の歌巡礼の旅」は、国内外合わせて22地域に及びました。

三「ハソウ贈呈で唐丹訪問」(2019年)

坂口憲一郎

唐丹小中学校を初めて訪問したのは2年前のクリスマス慰問でした。あの時の子供たちの目の輝きに感動したことは今も目に焼き付いています。今回は二度目の訪問になりますが、前回と同じように生徒たちの澄んだ瞳の美しさに感動しました。11時半頃、学校に着き、昼食までの1時間ほど校長室で待つことになりました。先ず目についたのは、ホワイトボードに貼ってある釜石新聞の記事で、大きな字で「**NHK** 全国短歌・俳句大会で最高賞・きょうロテレで全国放送」という見出しでした。



校長先生はこの一年間の学校報「不撓不屈」を見せてくださりながら、生徒たちの活躍ぶりを、次々話してくださいました。三年生の留畑瑞穂さんも『JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテス2018』で優秀賞に輝いたことやスポーツ大会での数々の輝かしい成果をお聞きしました。あの震災を乗り越え、皆で助け合って学校生活を送った中で目覚ましい成果をあげた生徒が多くいる事を知り、驚き

と同時に目を見張るものがありました。12時半頃、二人の生徒が校長室に入ってきて、給食会場に案内をしてくれました。多目的ホールに入ると大きな拍手で歓迎を受け生徒に交じって食事をいただきました。全校生徒・教職員合わせて55名ほどが一緒になっての昼食を家族的で和やかな雰囲気の中で大変美味しく頂戴しました。ごちそうさまでした。

午後は体育館で今年の卒業生12名に「ハソウ」と「ハソウ継承者証書」を贈呈させていただきました。キャロル・サックさんが奏でるハープに合わせて高館さんが「ハソウの祈り」を朗読した後に代表者に「ハ



ソウ」を贈呈させていただきました。キャロル・サックさんが唐丹の子供たちへ送った歌「I, YOU, WE」を、ハープを奏でながら歌うのに合わせて、私も一緒にハープを吹かせていただきました。西洋の楽器ハープと古代の和楽器ハソウが一つに溶け合い、歌詞「But we are friends, but we are friends, Friends in the

human family.」の思いが心に沁みてくるのを感じました。世界各地で紛争が絶えず、ハソウが「平和へのメッセージ」になればと思います。

ハソウを通じて平安の心を贈ります

坂口 宗憲



ハソウは、5世紀頃、朝鮮半島の新羅から伝えられた須恵器の技法で作陶された焼き物です。古墳から出土するハソウは、国立博物館で見ることが出来ます。上部はラツパ状、下部は丸く、小さな穴が開いています。考古学では、「酒器」ということになっていますが、この穴に息を吹き込むと、不思議な音がするので「笛壺」と呼ばれることもあります。



ハソウは大きさによって音程が違い、一緒に吹くと共鳴し、聞いている人の心に響き、安らかな気持ちになります。備前焼の作家好本宗峯は、備前市佐山に窯を開き、備前焼の源、須恵器の復活に取り組み、平成5年、ハソウの復元に成功しました。現在、宗峯の「平安の心」と須恵器の技法は子息の好本敦郎に受け継がれています。

在原業平の菩提寺、奈良の不退寺では、歌人、業平の霊を慰めるために、古く、ハソウが吹かれたと言われています。それにならって、平成

10年5月の業平忌に、ハソウによる供養が行われました。法要に参加した私は、ハソウを酒器としてだけでなく、「平安」の思いが込められた楽器として、現代によりみがえらせたいと決意しました。あなたが、ハソウの心を伝えて下さることを、とてもうれしく思います。その気持ちを込めて、あなたを「ハソウ継承者」として認定します。

2018年3月から行った、唐丹中学校卒業生への「ハソウ贈呈」を2020年3月で終了。これまでのハソウ継承証書授与者は121名（唐丹中学校卒業生73名、一般48名）。

2021年から唐丹希望基金活動終了年まで、唐丹希望基金の象徴として、ハソウを「鎮魂と平和」の思いを込めて唐丹中学校へ贈り、**唵**（ハソウ）には、毎年、「唐丹の思いを込めた文字」を刻陶します。第一回刻陶は、唐丹中学校校長 やぎとしかず 八木 稔 和 先生の「感謝」です。陶刻に込められた「唐丹の思い」が、子供たちに受け継がれ、逞しく成長する姿を見守り続けます。

◇ハソウ制作者 好本敦郎氏（故・好本宗峯氏二男）

四 **唵**に込めた五つの感謝

唐丹中学校校長 八木 稔和

（一）感謝する心の美しさ



今夏、1年間の延期を経て東京オリンピック、パラリンピックが開催されました。開催の是非について様々な意見が世間を騒がせ、新型コロナウイルス

感染症の収束がないままに開催できるのか、できないのかが直前まではつきりとせず、オリンピックに出場した多くの選手は心・技・体のコンディショニングにもものすごく苦勞したことを思います。しかし、その

大きな難を乗り越えて出場し、栄冠を手に入れた日本のメダリストたちは、競技直後のインタビューで「この大変な状況の中で、オリンピックを開催してくださったことに心から感謝します」と、自身の勝利の喜びよりもまずオリンピックが開催されたことへの感謝を伝えていました。その選手たちの心の在り方や品格が感じられる凜とした姿に胸が熱くなりました。自分のことよりも相手を思いやり敬意を表する精神、相手や周りに感謝する心の美しさにふれ、日本人としての誇りを改めて実感しました。

(二) いただいたご縁に感謝



東日本大震災から10年の月日が経った令和3年4月、私は新米校長として唐丹中学校に赴任するご縁をいただきました。見晴らしが良くおだやかで美しい唐丹湾を望む新校舎。純朴で明るく何事にも努力を惜しまず取り組む17人の生徒たち。日々生徒の良き成長を願い教育に情熱を燃やすチーム力抜群の教職員。学校をいつも温かく見守り何でも快く協力してくださる地域や家庭の皆様。

これ以上無いくらいに恵まれたすばらしい環境で令和3年度のスタートを切ることができました。おかげさまで、唐丹中に勤務するご縁をいただきやりがいのある充実した毎日を送ることができています。心から感謝の気持ちでいっぱいです。

(三) 支えてくださる皆様に感謝

唐丹中学校に着任し何日かして、唐丹希望基金代表の高館千枝子さんに電話で着任のご挨拶を申し上げました。唐丹希望基金について菊地正道前校長から物心両面にわたるたくさんのご支援をいただいたことは

伺っております。しかし、これまで歩まれてきた唐丹希望基金と学校との関わりや、この10年間の支援者の皆様からのどれほどのご支援が唐丹の子どもたちの心に火を灯してくださったのか私は知る由もありません。ましてや、この未曾有の大災害から必死な思いで立ち上がり、前を向いて一歩また一歩と歩んで来られた唐丹に暮らす方々の生き様も知りません。お電話を差し上げた時、



高館さんは、唐丹希望基金の活動の経緯について熱く語ってくださいました。直接すぐにお目にかかることはできなくても学校や子どもたち、唐丹の地への深い愛情がひしひしと伝わり、その熱意に敬服いたしました。震災から10年が経過し、当初の唐丹希望基金の支援活動は一つの区切りを迎えられたそうです。

しかし、唐丹の子どもたちが明るくたくましく育っていくことを願って今後も新たな形でのご支援を継続していただけることになりました。これまでの唐丹希望基金と学校とのつながりを礎として、「支援する」、「支援していただく」というつながりだけでなく、これから目指すべき共生の社会に向かうためのより良い関係を築いていけたらと考えています。その実現のために私たちができること、それはご支援していただいた「元気お届けすること」に尽きると思います。そのためにも、子どもたちが日々輝いて元気にたくましく成長していけるよう、私たち教職員は心を一にして日々の教育活動に誠心誠意努めていく所存です。全国にいらっしやる唐丹の子どもたちを応援してくださいさる皆様の存在は私たちの大きな励みです。皆様への感謝の気持ちを忘れずに、これからも唐丹中学校は前に進んでいきます。

(四) 生かされていることに感謝



新型コロナウイルスが世界中に猛威をふるい、間もなく2年になろうとしていきます。日々の生活はさまざまな制限や感染拡大防止の動きが求められ、その影響は、経済状況はもちろん生活様式や人間関係にまで波及しました。学校も然り、様々な行事は中止や縮小が余儀なくされ、学習活動もさまざまな制約の中で行っています。こ

れまで、当たり前だったことが当たり前では通らない日常生活になりました。ワクチンを接種しても安心できない感染状況。全世界の人々がいつか終息する日が訪れるのを待ちながら堪え忍んでいます。しかし、さまざまな我慢やストレスが尽きないこのような状況でも、毎日学校に通い生徒や教職員と笑顔であいさつを交わせること、やりがいを感じながら仕事ができること、そして何より日々健康に生活できていることは本当に有り難く幸せなことです。この世に生を受け日々生かされていることの有り難さを忘れず、生を全うできるように努めていきたいと思っています。

(五) 礎（ハソウ）に込めた感謝

唐丹希望基金より毎年ハソウを学校にご寄贈いただけることになりました。これまで唐丹希望基金を通じてご支援いただいたたくさんの方々の熱い思いや、唐丹希望基金の新たな一歩を踏み出してくださいと高館さんの思い、ご寄贈いただくハソウに込められている平和への祈りと鎮魂の思い…このたくさんさんの思いの全てに対して私は上手く応えることはできません。只々感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、人と人の心を過去から現在、そして現在から未来へとつないでいくのは感謝の心ではないかと思えます。何か自分に困難が生じたとき、

だまって寄り添ってくれたり、そっと手をさしのべて力を貸してくれたら、励まして元気や勇気をくれたり、時には自分の過ちに気づかせてくれたり。私たちは決して一人で生きられる存在ではなく、いつも周りの誰かに支えられながら生かされています。そして、それは決して当たり前「ありがとう」の感謝の心を忘れずに生きて前のことではなく、本当に

有り難いことであることを自覚し、いつでも
いきたいと心から思います。

そんな感謝への思いをハソウの刻陶に込め
させていただきます。



合 掌

「あとがき」

高館千枝子



須恵器ハソウの存在を知って5年経ち、好本宗峯さんの歩んだ須恵器復元の道のりをたどることが出来ました。岡山県備前市伊部訪問中に、「宗峯さんに一度お目にかかりたい」と心に思うだけで、言い出せなかった事を悔いるばかりです。2020年9

月、宗峯さんの訃報を知り、私の願いは叶うことはないのだと思うと、人生の中に大切な忘れ物をしたような、複雑な思いです。

ある日、須恵茶碗が、私のもとに届きました。月に一度、茶道を習いに来ている少年（小5）が、須恵茶碗でお茶を飲んだ時の事です。茶碗の中心に浮き出ている窯変を、ジッと見ながら何度も繰り返して言うのです。「ワ〜きれい、僕この茶碗大好き！欲しいな〜」と。ガラス状の窯変に興奮している様子を見て、須恵器について何の知識のない少年の好奇心に触れ、とても嬉しくなりました。私も、少年の好奇心にこた応えなければと思い、須恵器の話をし、薄茶点前も教え初めました。お茶が大好きでやってくる子供に「本気になって教えなくては」と。先ず、私が学ばなくてはと、少年に背中を押され、好本美代子夫人にお聞きしてま

とめたのが、『古代須恵器を愛した陶芸家』です。『ハソウの旅路―唐丹の子供たちに届くまで―』は、2011年4月から「唐丹希望基金」が支援する唐丹小中学校の子供たちに届ける為にまとめました。

ハソウの存在すら知らず、ましてや興味も関心もなかった「**碌**（ハソウ）」が、やがて私の心の友となり、「唐丹希望基金の思い」を込め、唐丹の子供たちに贈ったドラマチックな9年間の「**碌**（ハソウ）の旅路」です。

編集にあたり、宗峯さんの歩みを親身に話して下さった好本美代子様「鎮魂と平和の心」を真心こもった行動で教えて下さった坂口憲一郎様に心から感謝をお捧げいたします。

〔付記〕

2020年3月、政府の新型コロナウイルス感染蔓延防止策で、全国学校一斉休校措置がとられ、学校訪問が叶わず、止む無くハソウを郵送し校長に託しました。

3月14日、唐丹希望基金が参加する最後の卒業式。卒業式後に行われる父母主催「感謝の集い」も延期。唐丹希望基金支援者50名が参加するはずでしたが、新型コロナウイルスに記念行事の全てが奪われました。

写真の生徒達は、2011年4月唐丹小学校に入学し2020年3月に唐丹中学校を卒業した12名。唐丹希望基金の活動目標をこの生徒たちが中学を卒業するまでとし、2020年3月末に9年間の募金活動に区切りをつけました。tonidayori2015.pdf (ec-2020.com)
2020年4月から共生社会を目指し、新たな歩みを始めました。ハソウを2030年3月まで贈ります。

（写真 2019年11月撮影）



・参考文献 好本宗峯『備前須恵器再現展』図録 天満屋岡山店発行

・注 釈 ①好本宗峯『備前須恵器再現展』図録 「作家の言葉」

②緑和堂ホームページ (好本宗峯 (ryokuwado.com))

③好本宗峯『備前須恵器再現展』図録「好本宗峯の仕事」

④酸化焰成焼と還元焰成焼

https://touroji.com/elementary_knowledge/syousei.html

⑤E E C通信111号「鎮魂の歌巡礼の旅」111tushin.pdf (eec-2020.com)

⑥E E C通信84号「アメリカ・カナダ訪問」84tushin.pdf (eec-2020.com)

・協力 好本美代子氏 (故好本宗峯氏 夫人)

坂口 宗憲氏 (「ハソウを楽しむ会」会長)

編集 高館千枝子

〒028-3603 岩手県紫波郡矢巾町西徳7-7

・TEL : 019-697-3851

・Mail-Address : tchiekoo@cocoa.ocn.ne.jp

(2021年12月)

